//////////////////// *Polarography Lounge* //////////////////

祖父 “志方益三”

My Grandfather, Masuzo Shikata

志方 隆司*
Takashi SHIKATA

Received; April 26, 2015

2015 年 4 月 18 日、京都大学大学院農学研究科応用生命科学専攻 加納健司 教授の研究室を訪問しました。

武居三郎先生、加納先生から声をかけていただき、同研究室で開催された「集い」に参加させていただきました。

祖父 志方益三がポーラログラフの開発に携わっておよそ 90 年、今も続く研究室からのご招待に、驚きと感謝の気持ちで一杯でした。

訪問して新たな三つの感動を得ました。

最初の感動は益三が持ち帰った「ポーラログラフ 2 号機」が大切に展示されていたことです。写真で見たことはあったのですが、実物に出会ったのは初めてです。

加納先生から実物を見ながら仕組みをご説明いただきました。その道の専門家から実物を使って、わかりやすく説明いただける「幸福な時間」を過ごし、これまで私が思い違っていた点も明らかになり、計測から記録の流れを理解することができました。益三の研究が自動計測を可能にしたこと、それは単に記録を自動化したということに留まらず、自動計測により成分分析が可能になったことでした。ポーラログラフが、まさに分析科学の大改革をもたらした

こと、その仕組みを理解できたことが第二の感動です。

昭和 39 年 5 月 8 日、この日は小学校 1 年生だった私にとって、はじめての家庭訪問日でした。祖父は担任の先生と予定より長時間歓談し、にこやかに祖母に感想を伝えた後、床に着き再び目覚めることなくこの世を去りました。私が祖父と過ごした時間は「ものごころ」が着いてからこの日まで、実質三年程度でした。

祖父は時々吉田山へ散歩に出かけ、その時の「警護役」を私が引き受けていました（多分祖父はそう思っていなかったと思います・・・）。

祖父はステッキを突きながら歩道を進み、時々立ち止まって私にドングリを拾うよう

祖父益三と私

////////////////////

//////////////////////////////////// *Polarography Lounge* //////////////////////////////////

促し、あるいは周囲の樹木を指し示しながら「お話し」が始まりました。その内容は覚えていませんが、森の中であれこれ話すことは「ごく普通のこと」と私は思うようになっていました。

祖父から直接聞いて記憶に残っていることは僅かですが、後に母から常々祖父が言っていたことを聞きました。

「学」を「業」に置き換えられない学問は基礎科学。「学」を「業」に置き換えられる学問は応用科学です。応用科学は産業に結びついていなければなりません。

この言葉は農学部に進んだ私には、わかりやすかったものの、議論を始めると賛否両論があり、何をもって「産業に結びついている」と言えるのか等々、齢を重ねるほどになかなかの難問であると感じるようになりました。

この日集まれた先生方とお話しする中で、この言葉の意味は、「その仕事（研究、教育・・・）、産業を通じた人々の幸せに結びついていきますか？」という「自分自身の心の羅針盤」だと感じました。これが三つめの感動です。

祖父は農民の苦しみを救う道を科学に求め、真摯に科学に取組み、時には国の枠組みすら超えて科学の継続・発展に尽力してきました。

人には寿命がありますが、心に寿命はなく、いつまでも伝え受け止めて行くことができる。研究室の伝統として、この思いをしっかりと引き継いでこられていることを感じ、大変嬉しく思いました。

関係する皆様の方々の発展をお祈りします。

（京都府立林業大学校，教授）

////////////////////////////////////